２１世紀の日本のかたち（２２）

-- 日中都市景観上海フォーラム報告 --

戸沼幸市
＜(財)日本開発構想研究所 理事長＞

１．世界都市上海の景観

先日（9 月 28 日）、上海市の同済大学のホールを主会場にした世界華人建築家協会主催の都市景観フォーラムに参加する機会を得ました。

フォーラムの主題発表は、日本側「景観法と日本の取り組み」西村幸夫東大教授、「東京の景観計画について」戸沼、中国側「上海の景観問題」呉偉同済大学教授、「中国の歴史的景観の保存」阮儀三同済大学教授が行いました。

つづいて、中国のいくつかの都市、地方政府からの参加者と都市景観に関し、互いの経験を交換し、話し合いました。

上海では 2010 年万国博覧会―テーマ「Better City Better Life」が開かれることになっており、都市景観に関心が高まっています。そしてこの万博開催に合わせて、今、急ピッチで会場建設と上海のインフラ整備、都市再開発が進められていました。

浦東空港から上海駅間は既にリニアモーターカー（上海トランスラピッド：最高速度 430km）が走り、ものの 10 分で都心と結ばれています。

また、地下鉄線数本を新設するとか、いくつもの作業現場に出会いました。つい 15 年前にはなかった高速自動車道路も上海市の地下に地上に縦横に出来ており、かつての東京オリンピック（1964）前夜を思い出させます。ただ、自動車が急増し、この道路キャパシティではとても追いつかず、あちこちの渋滞ぶりと自動車からの排気ガスは相当なものです。

現代上海の都市景観として、黄浦江岸金融中心地区の超高層建築群、上海環球金融中心―森ビル 492m、オリエンタル TV 468m、ジンマオビルディング 421m が思い思いの形で高さを競っております。これら 400m級は湿気の多い上海の灰色の空の中に、しばしば隠れてしまうのですが。

対岸のバンド地区は 19 世紀イギリス、フランスなどがつくったヨーロッパスタイルの堅牢な建造物のいくつかが、歴史の断面を示すように今も残っております。

上海は、もとは漁村であり、もともと海に向かって開かれた都市です。上海は 19 世紀中葉から 20 世紀初頭の第一次グローバル化の波を中国として先端的に受け入れた空間であり、以来国際都市としての色彩を強めていきました。そして今、21 世紀初頭の第二次グローバル化の波を正面から受け入れている中国第一の世界都市といえます。

現在、上海は世界のカネ、ヒト、モノ、そしてスタイルを広大な中国内陸部をバックに、より積

極的に受け入れようとしているかのように見えます。今、日本人が一番多く住んでいる外国の都市は上海で、4万8千人（平成20年10月1日現在：海外在留邦人数調査統計速報値）が居住しています。既に10万人が住んでいる説もあるようです。

上海を中心にした長江デルタ、沿海地方は今や中国の成長経済を推し進めるダイナモといっていいでしょう。それだけに世界の経済変動をもろに受け、昨年来のアメリカ、リーマンショックはここ沿海地方に来ていた労働者ら 6000 万人が内陸に引き上げたとのことです。

経済成長といったものは基本的には人口増と平行するものであり、この点では21世紀の少なくとも前半は13億人から15億人に向かう中国が、世界の経済成長の中心的舞台にちがいありません。

上海の郊外、上海から蘇州の中間には、中国とシンガポール両国政府間の合作プロジェクトである蘇州工業園区（Suzhou Industrial Park）が数十万人単位と思えるニュータウンと共に忽然と出現していました。

上海の都市景観で印象深いのは、かつての低層住居地が取り払われ、そこに現れた超高層住宅棟の林立です。案内してくれた呉教授の話しでは、超高密高層の香港の景観がそっくりそのまま移ってきたといっておりました。急ごしらえのこの超高層はやがて問題になるとは上海の人びとも思っているらしいのですが。

戦後、日本の高度経済成長を人口の挙動に重ねていえば、戦後、8000 万人から1億 2000 万人への人口増加期、農村人口、地方人口を東京が引き受け、ここに一極集中させ、都市域を急拡大しつつ巨大都市になった経緯を思い出します。

これを中国でいえば、日本を格段にスケールアップさせた形で、内陸の巨大な農村人口が都市側に押し寄せ、大都市化、巨大都市化を求めている状況といえます。

中国には 3000 万人クラスの巨大都市圏がいくつか現れていますが、上海はこれに世界都市化を重ねて急成長していると考えられます。

２．都市景観と色についての議論

今回のフォーラムの中国側参加者の関心は、日本の景観法（2004 年 12 月施行）以来、東京はじめ日本の都市がこれを活用してどんな景観計画を立て、景観づくりに取り組んでいるかでした。

私は十年来、東京都の景観計画づくりに参画した経緯もあり、1.自然を大切にする、2.歴史を大切にする、3.地域の個性・多様性を尊重する、という東京都景観計画の理念を述べつつ隅田川景観基本軸などの考え方を紹介しました。日本の高度経済成長期、東京などが性急な開発によって乱雑化した景観の整序を、石油エネルギー多消費型から21世紀新生態系型への転換として取り組み始めたことを報告しました。

上海の中心部を流れる、黄浦江などは、格好の景観軸になり、水と緑からの景観づくりの良い素材だとの感想も述べました。

エコロジーについては、鳩山総理が先日、国連で CO_2 を 1990 年比で 25%削減と明言していますが、会場の雰囲気は、高度経済成長路線を走る上海として、今一つ、これに乗ってくる感じではありませんでした。ただ、都市における高速道路の扱いについては上海でも気にしており、韓国のソウル特別市の中心部を流れる清渓川を覆っていた高速道路を取り除き、市民散策の空間にした例や、日本の日本橋上空の高速道路を地下化する案も知っており、出来るだけ地下化しようとしている様子でした。グローバルな情報時代、先発組の誤りはできるだけ避けたいという気運は感じます。

歴史的遺産や景観については、10年前に比べて、格段に関心が高まっている気配でした。日本のよ

うに市民が保存を求め、運動をするといったことはあまりないようですが、専門家、学者が、政府に直接働きかけて保存をめざすといった風です。

10年来の知己である阮教授は昔からこの先頭に立っており、当局によって対象物が取り壊しの作業を始めた現場に駆けつけて中止させているのだと豪語しておりました。

歴史的遺産の保存か再開発か、その中間的手法はないのかなどについては、西村教授が日本のいくつかの事例を紹介しました。

中国はなんといっても、中央、地方政府が強い権限を持っており、住民参加、市民参加の都市づくりまちづくりとは遠いものがあると感じられますが、逆にいえば、土地が国有の上、政府の方針で一気にことが進むことになります。上海万博に合わせて、1,000以上の看板広告が取り除かれることになり、万博会場付近の住宅屋根瓦の色を青色一色にしたりができるのです。ただ事が政府によって独断的に決められ、結果が単調になるきらいがあるようですが。

今回の景観フォーラムにおいて「都市の色」がひとしきり話題になりました。景観の操作手段として、広告・看板とともに、建物や公共施設の「色」をどうするかは、人びとに扱いやすく分かりやすいテーマです。

東京都景観計画においては、色を表する要素―色相（いろあい）、彩度（鮮やかさ）、明度（明るさ）から、建物に関しては自然素材を生かし、けばけばしい高彩度を避けるなど地域特性を生かした色彩計画の考え方をとっています。中国でも都市の広告や色について一定の考え方を持ちたいとしているようです。

広告、看板については、資本主義国日本の都市には、けばけばしい看板が溢れ、大きなスクリーンの映像看板までが街に出現しています。街を走る自動車や電車のボディにまで色刷り広告が貼られています。情報化も映像情報の時代に入り、日本の都市は色について爛熟気味です。

日本から中国の色や看板について意見を申し述べるのは容易なことではありません。ただ面白いことに、市場経済を取り入れた中国において、広告看板類が都市の中に徐々に多くなってきていること、逆に単調なモノトーンの住宅地やまちにもう少し色気を持たせたいという気運を感じました。

10月1日は新中国建国60周年の国慶節でした。上海でも通りやまちまちに赤地に5つの黄色い星を配した小旗（五星紅旗：中国の国旗）がたくさん掲げられておりました。

日中の都市景観、さらに国のかたちと色について、フォーラムにおいて一議論しましたが、来年、上海で開かれる万博、「Better City、Better Life、よりよい都市、よりよい生活」に上海、中国がどんな答えを出してくれるのかが楽しみです。中国の朱色に塗られた逆基壇のシンボル館も姿を見せておりました。

来年の再会を約して、現代世界の様ざまな問題に直面しつつ、さらなる世界都市化を続けている上海を後にしたことでした。

（2009．10．15）